



THE FUKUOKA
ASIAN CULTURAL PRIZES

第6回
福岡アジア文化賞
THE 6th
FUKUOKA ASIAN CULTURAL PRIZES

1995

大 賞
GRAND PRIZE

氏 名
クンチャラニングラット

Name: **KOENTJARANINGRAT**

生年月日
1923年 6 月15日生 (72歳)

Date of Birth: **June 15, 1923 (Age:72)**

国 籍
インドネシア共和国

Nationality: **Republic of Indonesia**



プロフィール

古都ジョクジャカルタに生まれたクンチャラニングラット氏は、子供の頃からガムランの演奏や宮廷舞踊などのジャワ文化に深く興味を抱き、ガジャマダ大学を経てインドネシア大学に学ぶ。在学中に調査を補佐したことで人類学に惹かれた同氏は、インドネシア大学卒業後、米国イェール大学に留学。マードック教授の教えを受け、ジャワの親族体系に関する研究をまとめて、文化人類学者としての道を歩き始めた。

帰国後はインドネシアの文化人類学を担う中心人物としてインドネシア大学、ガジャマダ大学等で教鞭をとり、新興独立国における人類学、ひいては社会科学の振興発展の基礎を作り上げた。中部ジャワを中心としたフィールドワークは、比較の視点から、イリアン・ジャヤ、オランダ、旧ユーゴスラビア、ベルギーにまで及び、精力的に膨大な量の著作を残した。同氏編集の『インドネシアの諸民族と文化』(1970)は、初めてインドネシア人によって書かれた記念碑的な文化人類学研究書としてすでに古典となっている。『ジャワの文化』(1984)は、世界中のジャワ研究成果の集大成であるだけでなく、数々の西洋的な見方の誤りをも是正した画期的な地域研究書として高い評価を受けている。さらに、インドネシア科学院国立文化研究所所長、同科学院副院長などの要職を歴任し、1991年に新設されたインドネシア科学アカデミーの数少ない初代メンバーを務めるなど、同国の社会科学界の重鎮としてだけでなく、国際的に著名な、アジアを代表する人類学者として活躍を続けている。極めて温厚な人柄で知日派であり、趣味で描いてきた画は独特の風格を持ち、個展で好評を博するほどの芸術家的雰囲気をも漂わせている。

略 歴

- 1923 ジョクジャカルタで誕生
1943-45 ジャカルタ中央図書館司書補佐
1945-46 タマン・シスワ民族高等学校教師
1950 ガジャマダ大学卒業
1956 イェール大学人類学修士号
1958 インドネシア大学人類学博士号
1958-61 インドネシア大学、ガジャマダ大学講師
1962-88 インドネシア大学教授
1964-66 インドネシア科学院国立文化研究所所長
1966-67 ユトレヒト大学客員教授
1967-77 インドネシア科学院副院長（人文社会科学担当）
1970-80 ガジャマダ大学教授
1976 ユトレヒト大学社会科学名誉博士号
1986 英国王立人類学協会名誉会員
1988 インドネシア大学名誉教授
1991-92 京都大学東南アジア研究センター客員研究教授
1991 インドネシア科学アカデミー会員
1994 インドネシア政府より特別功労メダル授与

主な著作

- 『ジャワ人の親族体系の予備的記述』イェール大学出版、ニューヘブロン、1957〈英文〉
『社会人類学の基本問題』ディエン・ラヤット社、ジャカルタ、1967
『インドネシアの村落』（編）コーネル大学出版、イサカ、1967〈英文〉
（インドネシア語訳、インドネシア経済協会、ジャカルタ、1984）
『インドネシアの経済開発における心的阻害要因』プラタラ社、ジャカルタ、1969
『インドネシアの諸民族と文化』（編）ジャムバタン社、ジャカルタ、1970
（邦訳、めこん社、東京、1980）
『文化、精神構造と開発』グラメディア社、ジャカルタ、1974
『インドネシアにおける人類学』マルティヌス・ネイホフ社、ハーグ、1975〈英文〉
『文化人類学入門』アクサラ・バル社、ジャカルタ、1979
『ジャワの文化』バライ・プスタカ社、ジャカルタ、1984
（英訳、オックスフォード大学出版、クアラルンプール、1985）
『インドネシアにおける民族的多様性と国民統合』ISEAS、シンガポール、1989〈英文〉
『インドネシアの孤立した部族』（編）グラメディア社、ジャカルタ、1993
『イリアン・ジャヤ——複合社会の開発』ジャムバタン社、ジャカルタ、1994

贈賞理由

クンチャラニングラット氏は、現代のアジアを代表する卓越した文化人類学者であり、広く各界から畏敬され、国際的に最も評価を受けている文化人である。

ジャワ文化の伝統の中で生まれた同氏は、その伝統を背景に、アメリカで文化人類学を学び、ジャワ社会における親族、共同作業、宗教などに関する優れた論文によって、若くして国際的な注目を浴びた。インドネシアの国内では、自分自身の研究はもとより、広く学問体系、研究者養成、教育制度に目配りして、新しい学問としての文化人類学の確立に努めてきたその功績は計り知れないものがある。

ジャワの伝統組織の分析、解釈などから始まった文化研究は、南ジャワでのフィールドワークなどをも加えて、大著『ジャワの文化』に集大成され、地域研究に金字塔を打ち立てるに至った。さらに西洋諸国でもフィールドワークを行うことによって西洋発祥の学問としての人類学を相対化し、文化人類学の学説史や、新しいパースペクティブの導入など数々の優れた論稿を残している。特にオランダで発行された『インドネシアにおける人類学』は、従来の研究に対する批判的集大成として画期的なものであり、その後のインドネシア研究の流れを大きく方向づけたといえる。

また、このような幅広い人類学的分野の知見を背景にクンチャラニングラット氏は、現在、アジアの多くの国が直面している開発・近代化の問題について、活発な著作活動を続けてきた。急激な開発が行われるなかで、伝統文化の行く末に深い関心を寄せ、適切な教育を踏まえた多文化社会の共存を主張するなど、積極的な提言によって開発政策にも影響を与えている。

同氏は、インドネシアを代表して国際会議に数多く出席し、海外の諸大学で客員教授として活躍するなど、国際交流に労を惜しむことなく尽力し、各種の国際的な名誉称号授与の栄に輝いている。インドネシアの学術研究政策にも深く関わり、1967年から10年間インドネシア科学院の副院長をも務めた。人類学一筋に生きながら、篤実、温厚な人柄で人々を魅了し、国際社会において広く信頼と尊敬とを集めている、希有な大学者である。

このようにクンチャラニングラット氏の業績は、インドネシアにおける人類学のフロンティアを切り開いたのみならず、アジア文化とその研究の意義を広く世界に示し、アジアと世界との相互理解の推進に大きく貢献したと高く評価できるものであり、まさしく「福岡アジア文化賞一大賞」にふさわしい優れた功績といえる。

学術研究賞・国際部門

ACADEMIC PRIZE : INTERNATIONAL

氏名
韓 基 彦

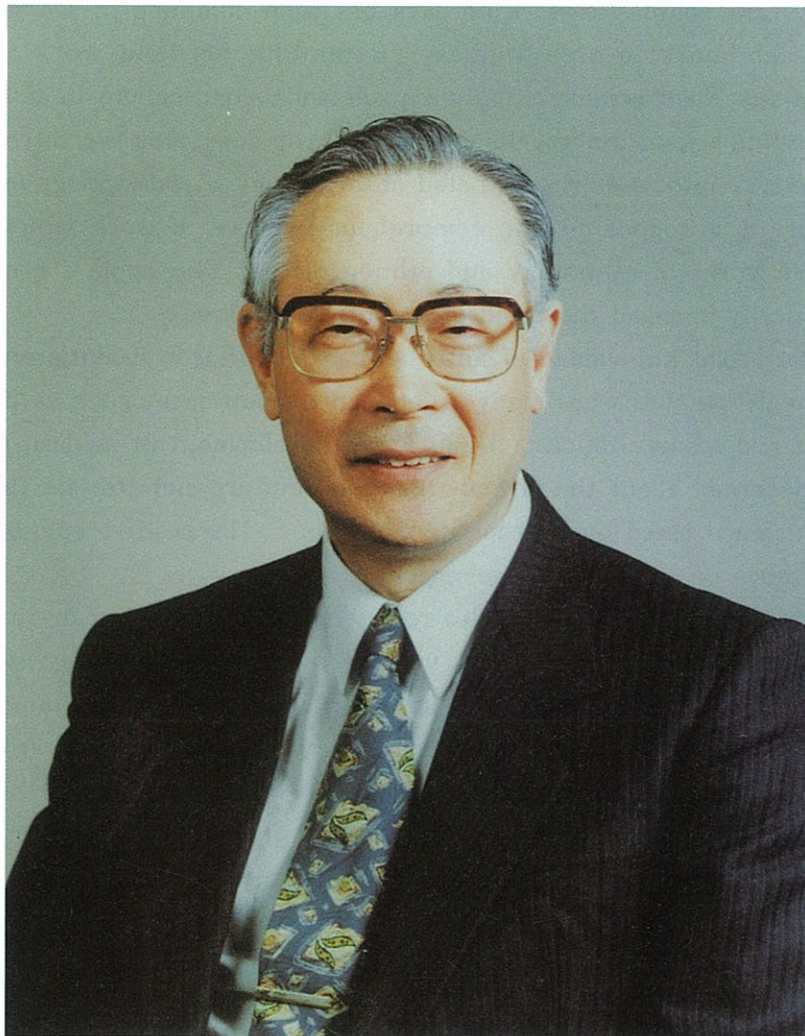
Name:HAHN Ki-un

生年月日
1925年1月19日生 (70歳)

Date of Birth:January 19, 1925 (Age:70)

国籍
大韓民国

Nationality:Republic of Korea



プロフィール

ソウルに生まれた韓基彦氏は、二十歳の時、国権の恢復（1945年8月）を契機として教育学を志すようになり、ソウル大学校師範大学、同大学院に学ぶ。卒業後、母校において講師、助教授、教授として38年間にわたり教鞭をとる。一方、コロンビア大学、広島大学、国立教育研究所（東京）など海外においても研究活動を行い、韓国の代表的教育学者として活躍してきた。また韓国教育学会の創立に参画し、同学会長を勤めたのをはじめ、韓国社会科教育学会長、基礎主義学会長等多くの学会会長を歴任するなど、常に韓国教育学界をリードしてきた。

旺盛な著述活動は、主著『状況と基礎』（1990）を筆頭に多くの著書によって知られており、なかでも『韓国教育史』（1963）は、古代から現代に至るまでの韓国の教育制度ならびに教育思想を通観した最初の韓国教育史であり、これは日本語にも翻訳されている。

韓氏が提唱する「基礎主義」(Foundationism)は、同氏がコロンビア大学において研修中の1957年に命名し、その後さらに理論化、体系化されたもので、この間約40年にわたる研究成果が蓄積された独創的な教育哲学、教育理論である。人間形成の基本原則を中心としたこの基礎主義理論の原型は、同氏が得意とする水泳を通じて発想したものという。実際には出場を果たせなかったものの、同氏はロンドン・オリンピックの韓国代表選手に選ばれたことがあり、大韓水泳連盟常任理事として韓国と日本の水泳交流にも貢献したスポーツマンである。

略 歴

- 1925 ソウルで誕生
1949 ソウル大学校卒業
1952 ソウル大学校大学院卒業
1952-65 ソウル大学校師範大学講師、助教授、副教授
1957-58 コロンビア大学交換教授
1965-90 ソウル大学校師範大学教授
1965-77 韓国社会科教育学会会長
1969-70 広島大学教育学部客員教授
1970 ソウル大学校文学博士
1973 韓国教育学会学術賞受賞
1980-81 国立教育研究所（東京）客員研究教授
1982-84 韓国教育学会会長
1990 ソウル大学校名誉教授
1990 国民勲章冬柏章受章
1991-92 韓国精神文化研究院客員教授
1992- 基礎主義研究院院長
1992 ソウル市文化賞受賞
1994 天園教育賞受賞

主な著作

- 『韓国教育史』博英社、ソウル、1963（邦訳、広池学園出版部、東京、1965）、1983（増補版）
『韓国教育の理念』ソウル大学校出版部、ソウル、1968、1974（増補版）
『韓国思想と教育』一潮閣、ソウル、1973
『基礎主義』培英社、ソウル、1973
『教育の歴史哲学的基礎』実学社、ソウル、1975
『韓国教育哲学の構造』乙酉文化社、ソウル、1977
『東洋思想と教育』法文社、ソウル、1978
『現代人と基礎主義』世光公社、ソウル、1979
『韓国人の教育哲学』ソウル大学校出版部、ソウル、1988
『状況と基礎：球象教育哲学としての基礎主義』ソウル大学校出版部、ソウル、1990
『教師の哲学』良書院、ソウル、1994

贈賞理由

韓基彦氏は、現代韓国を代表する最も著名な教育学者で、教育史、教育哲学、比較教育学、社会科教育学など、幅広い分野で活躍している。

1925年、ソウル市において、教育を重んじる家庭に生まれた同氏は、少年時代以来の優秀な成績を認められ、官立京城師範学校で8年間の一貫教育を受けた。1945年、同氏が20歳の時、国権が恢復されると、同氏は新しい国づくりを目指して、教育学者として身を立てることを決意し、ソウル大学校で教育学の研究を始めた。その結果、同氏は韓国で初めての教育学専攻の修士号及び博士号を獲得することになった。そして、1952年以来、1990年に定年退官するまで38年間の長きにわたって母校ソウル大学校で教育学を研究、教育し、多くの優れた研究業績を上げるとともに、数多くの優秀な教育学者を養成してきた。その一端は、今日、韓国教育学界の第一線で活躍している多くの教え子たちによって編纂、刊行された還暦・古希・定年記念論文集という韓国教育学における記録的な記念論文集三部作となって結集されたことを見ても理解できる。本年は、同氏が教育学研究に取りかかって、ちょうど50周年の節目に当たる。

韓氏の教育学理論は「基礎主義」(Foundationism)として広く内外に知られている。この考え方によれば、伝統と革新との調和を計り、これを通じて人間形成が行われるとされ、中庸と調和という点に重要な意味が含まれている。そこでは伝統を重視する英知と同時に、改革を恐れない勇気が尊ばれる。同氏は国際的視野を十分に踏まえた上で、韓国固有の教育学を定立することの重要性を指摘する。つまり、そこでは教育文化の国民的民族的個性・土着性が確保されると共に、国際社会における普遍性が主張されているのが大きな特徴である。

同氏は、早くも1960年代の初期から国際理解の教育の重要性を主張し、これを自ら初代学会長を務める社会科教育学会において実践してきている。これは基礎主義の教育現場における実践であり、またユネスコ・アジア地域国際協同学校計画会議でも重責を担うなど、国際平和の実現に教育学者として最大限の役割を果たした。同氏の教育理論家、実践家としてのリーダーシップは、韓国教育学会長、基礎主義研究院長などの要職を通じて、遺憾なく発揮された。

このように、韓基彦氏が韓国の土壌に根ざしつつも、文化の伝承と発展を計る教育学を理論的に体系化し、早くからその普遍的意義を国際社会に訴え、また課題解決のため、教育実践を通して国際社会に大きく貢献してきたことは、まさしく「福岡アジア文化賞—学術研究賞・国際部門」にふさわしい業績であると評価する事ができる。

学術研究賞・国内部門
ACADEMIC PRIZE : DOMESTIC

氏 名 Name: Noboru KARASHIMA

から しま のぼる
辛 島 昇

生年月日 Date of Birth: April 24, 1933 (Age:62)

1933年 4 月 24 日生 (62歳)

国 籍 Nationality: Japan

日 本



プロフィール

辛島昇氏は、東京生まれ、神奈川県鎌倉市で育った。占領下日本での被支配体験が同じ体験を共有した他のアジア地域の研究へと氏を向かわせ、東京大学文学部東洋史学科でインド史を専攻する。同大学大学院在学中に、南インドへの数少ない日本人留学生としてマドラス大学に学ぶ。帰国後、東京外国語大学A・A研さらには東京大学文学部で研究と教育に献身し、多くの後進を育てた。その間、マドラス大学およびインド刻文史料編纂所の研究者と国際共同研究を推進するとともに、国内においても多くの研究者の中心となって南アジア地域研究の組織化と発展に尽くす。1994年に東京大学を退官後、大正大学に転じて南アジア研究の新たな拠点形成に努めている。

辛島氏は、タミル語刻文史料の厳密な読解と分析また統計処理をもとに、日本における南インド史研究を開拓してきただけでなく、その研究業績はインド本国ならびに世界の学界で高く評価されている。1980年のドラヴィダ言語学会最優秀図書賞受賞、1985年のインド刻文学会会長就任、また1989年以降現在に及ぶ国際タミル学会会長としての活躍は、氏への評価の高さを例証する。本年1月には第8回国際タミル学会大会を主宰し、様々な困難のなかで成功に導き得たのも、第一級の世界的研究者にしてよき組織者という氏の実力と人柄の賜物である。こうした研究活動に加えて、『インド入門』(1977)、『ドラヴィダの世界』(1994)などの高水準の一般書を編集、刊行して、日本人の南アジア理解の増進にも大きく寄与してきた。

略 歴

- 1933 東京で誕生
1958 東京大学文学部東洋史学科卒業
1961 東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了
1964 東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退
1964-67 東京大学文学部助手
1967-71 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所講師
1971-74 同上 助教授
1974-81 東京大学文学部助教授
1980 ドラヴィダ言語学会最優秀図書賞受賞
1981-94 東京大学文学部教授
1985 インド刻文学会会長
1989- 国際タミル学会会長
1993 東京大学文学博士
1993 史学会理事長
1994 東京大学名誉教授
1994- 大正大学文学部教授
1995 インド刻文学会名誉会員

主な著作

- 『インドの顔』（生活の世界歴史5）（共著）河出書房新社、東京、1975
『インド史における村落共同体の研究』（編著）東京大学出版会、東京、1976
『インド入門』（編著）東京大学出版会、東京、1977
『チョーラ朝刻文人名索引』3巻（共著）SIP出版、マドゥライ、1979〈英文〉
『インダス文明——インド文化の源流をなすもの』（共著）日本放送出版協会、東京、1980
『南インドの歴史と社会』オックスフォード大学出版会、デリー、1984〈英文〉
『インド世界の歴史像』（民族の世界史7）（編著）山川出版社、東京、1985
『インダス川からメコンデルタまで』（編著）NE出版、マドラス、1985〈英文〉
『南アジア』（地域からの世界史5）朝日新聞社、東京、1992
『新しい体制——ヴィジャヤナガル朝支配下の南インド社会』
オックスフォード大学出版会、デリー、1992〈英文〉
『南アジアを知る事典』（監修）平凡社、東京、1992
『東南アジア世界の歴史的位相』（共編著）東京大学出版会、東京、1992
『ドラヴィダの世界——インド入門II』（編著）東京大学出版会、東京、1994
『南インド社会の歴史的発展』1、タミル考古学会、タンジャーヴール、1995〈タミル語文〉

贈賞理由

辛島昇氏は、南インド史さらには南アジア史の研究者として、アジアを代表する学者である。同氏の出現によって、南インド史は書き換えられたといっても過言ではない。その問題関心は、厳密な史料批判に基づく実証研究を通じて、南インド社会の歴史的発展過程の全体像を解明することにある。対象とする10世紀から17世紀の歴史研究は、寺院の石碑や壁面に刻まれた刻文を基本史料とするが、その読解は困難であり、従来の研究の多くは、公刊された少数の刻文史料のみに依拠していた。しかし同氏は、インド人研究者として協力して未出版の刻文史料を渉猟するとともに、タミル語刻文の厳密な読解と電算機による史料情報の統計処理をもとに、新たな歴史的事実の解明に努めてきた。その一例をあげると、チョーラ朝末期の12～13世紀にすでに土地私有制が成立していたとの論証がある。これは、南インド史のみならず南アジア史全体への画期的な発見であり、また旧来のアジア社会停滞論史観への確実な批判である。このほか氏は、南インド史上における国家行政、制度、社会、経済、生活空間などの広汎な問題にわたって優れた研究成果を提示した。その業績のゆえに、1985年にはインド刻文学会会長、また1989年以降は国際タミル学会会長に推挙されている。人文社会科学の領域で、日本人研究者が研究対象国の学会会長職に就任する例は希有であり、同氏の研究業績への評価の高さを端的に物語る。

また辛島氏は、歴史家としての眼に、長期の留学を含む生活者としての眼を加えて南アジアをとらえ、現在生起しつつあるカースト、民族、宗教などの問題についても卓越した洞察を加えてきた。地域研究者としての同氏の重要な一面である。さらに南アジアと東南アジアの史的関係の再検討をめざして、関係各国の研究者に呼びかけて国際研究プロジェクトを組織し、推進しつつある。国内においても、日本南アジア学会の設立、また『南アジアを知る事典』などの編纂にあたって中心的な役割を果たしてきた。わが国における南アジア研究の進展も、同氏の存在を抜きにしては語りえない。

このように、辛島昇氏の南インド史研究への国際的な寄与、また南アジアと日本との相互理解の増進、さらにわが国における南アジア地域研究の推進への貢献はまことに大きく、まさしく「福岡アジア文化賞—学術研究賞・国内部門」にふさわしい業績といえる。

芸術・文化賞
ARTS AND CULTURE PRIZE

氏 名
ナム・ジュン・パイク
(白南準)

Name: Nam June PAIK

生年月日
1932年7月20日生 (63歳)

Date of Birth: July 20, 1932 (Age: 63)

国 籍
アメリカ合衆国
(大韓民国出身)

Nationality: The United States of America
/born in the Republic of Korea



プロフィール

ソウルに生まれたナム・ジュン・パイク氏は、東京大学文学部美学・美術史学科に進学、音楽美学を修めた。卒業後、さらに現代音楽を学ぶために渡ったドイツで、前衛作曲家ジョン・ケージに出会って大きな影響を受け、1959年にピアノを壊すという衝撃的なパフォーマンスで注目される。その後、前衛芸術運動のグループ「フルクサス」に加わり、既存の芸術破壊のための数々のパフォーマンスを展開するうちに、1963年、新しいメディアであるテレビに芸術表現の多様な可能性を見つけ、画像を磁石で操作したテレビを13台も使った個展を初めて開催した。これは後の「ビデオ・アート」の原型となるものであった。

翌年からニューヨークに活動の場を移し、「フルクサス」の一員であるチェロ奏者シャーロット・モーマンと組んで、以後の約20年間、チェロやTV映像を使った数多くの衝撃的なパフォーマンスを世界各地で演じつつ、次第に映像作家としての評価と地位を高めていく。この間、日本人技術者の阿部修也の協力で開発した新しいビデオ装置〈パイク／アベ・ビデオ・シンセサイザー〉を駆使して、めくるめくような色彩とフォルムの独創的な映像作品を次々に制作発表し、ついに1980年代初頭には、この分野における世界の第一人者と目されるようになった。写真とも映画とも異なるビデオ独自の映像世界を創始した氏の作家活動は、芸術の新たな表現領域としてのビデオ・アートを確立させることになり、「ビデオ・アートの父」とも呼ばれている。

ビデオ彫刻やビデオ・インスタレーション、世界中を通信衛星で結ぶ世界的規模のサテライト・アートなどを次々に企画して常に新たなアート・シーンを展開し、現在も映像芸術の第一線にたって活動を続けている。

略 歴

- 1932 ソウルで誕生
- 1956 東京大学文学部美学・美術史学科を卒業、ミュンヘン大学で音楽史を学ぶ
- 1959 デュッセルドルフでピアノを壊すというパフォーマンスを初めて行う
- 1961 前衛芸術運動グループ「フルクサス」に加わる
- 1963 テレビを使った最初の個展
「音楽の展覧会——エレクトロニック・テレビジョン」を開催
- 1964 ニューヨークに移る
- 1969 パイク／アベ・ビデオ・シンセサイザーを開発、
以後数々のテープ作品を生み出す
- 1977 国際的な現代美術展「ドクメンタ6」に
本格的なインスタレーション「TVガーデン」を出品
- 1982 ニューヨークのホイットニー美術館で回顧展を開催
以後、パリ、ロンドン等欧米各地で展覧会を開催
- 1984 ニューヨーク・パリ間衛星中継番組放送
- 1988 ソウルオリンピックのために「多いほどよい」を制作、
また11ヵ国12都市間衛星中継番組を放送
- 1989 福岡市美術館で「ナム・ジュン・パイクのロボット家族展」を開催
- 1992 韓国国立現代美術館で回顧展を開催
- 1993 「ヴェネチア・ビエンナーレ」で金獅子賞を受賞

主な作品

- 「ジョン・ケージに捧ぐ」1973
- 「グローバル・グローヴ」1973
- 「ビデオ・フィッシュ」1976
- 「TVガーデン」1977
- 「ヴィラミッド」1982
ニューヨーク・パリ間衛星中継番組「グッドモーニング・ミスター・オーウェル」1984
ニューヨーク・東京・ソウル間衛星中継番組「バイ・バイ・キップリング」1986
- 「多いほどよい」1988
11ヵ国12都市間衛星中継番組「ラップ・アラウンド・ザ・ワールド」1988
- 「TV仏陀」1992

主な出版物

- 『タイム・コラージュ』ISSHI PRESS、東京、1984
- 『あさってライト』PARCO出版、東京、1988
- 『フィード・バック&フィード・フォース』ワタリウム美術館、東京、1993

贈賞理由

ナム・ジュン・パイク氏は、新しい芸術領域である「ビデオ・アート」の創始者として世界に知られる、アジアが生んだ偉大なアーティストのひとりである。

幼少の頃からピアノと作曲の教育を受けていた同氏は、東京大学文学部美学・美術史学科で主に音楽美学を学んだが、さらに現代音楽を学ぶために渡ったドイツで、前衛的な現代音楽家ジョン・ケージ氏を知ったことが大きな転機をもたらすことになった。後に、前衛芸術家集団「フルクサス」に参加し、既存の芸術破壊のための数々の衝撃的なパフォーマンスで注目を集めるようになるが、ちょうどその頃、電子音楽の研究中に、同じ電子技術の所産であるテレビ映像の可能性に誰よりも早く着目し、1963年、世界で初めて、テレビを使った個展を開催した。これは、後のビデオ・アートの原型となるもので、テレビが新しい芸術媒体となることを示唆する画期的なものであった。

やがて、活動の場をアメリカに移したパイク氏は、ビデオの普及に力を得て、ビデオ映像という新しい表現領域を芸術にまで高めるべく、あらゆる可能性を精力的に模索して行く。日本人技術者の阿部修也氏の協力で開発した新しいビデオ装置「パイク／アベ・ビデオ・シンセサイザー」を駆使して、“めくるめく色彩や変幻自在のフォルム”といった、ビデオ映像独自の特質を生かした独創的なビデオ・テープ作品を次々に発表して高い評価を獲得し、次第に、その斬新で革新的な映像芸術「ビデオ・アート」は他の追随を許さぬものとなって行く。そして、1980年代初頭には、ついにこの分野の世界的な第一人者と目されるようになり、「ビデオ・アートの父」と賞賛されるようになったのである。

また、展示空間に大小さまざまなテレビを設置するビデオ・インスタレーション、テレビやビデオを使って行為するビデオ・パフォーマンス、世界中を衛星で結ぶサテライト・アートなど、現在でも常に世界各地で新たなアート・シーンを創出しながら第一線で活躍を続けているパイク氏のたゆまぬ創作活動は、美術の領域のみならず、デザイン、建築、音楽、さらにマスコミュニケーションの分野にまで影響を与えると同時に、その新しい映像芸術の世界は、来るべき21世紀の新たな芸術表現のひとつのあり方を示唆している。

このように、ナム・ジュン・パイク氏は、最新のテクノロジーと美術を結びつけながら、その芸術の根幹に流れる東洋の精神を通じて、アジアの感性のすばらしさを世界に知らしめ、広く芸術・文化の発展に貢献した。これは、まさしく「福岡アジア文化賞—芸術・文化賞」にふさわしい業績といえよう。

公式行事スケジュール

行 事	日 時	場 所
○授 賞 式	9月28日(木) 午後2時～3時30分	福岡サンパレス
○記 者 会 見	9月28日(木) 午後4時～4時40分	福岡サンパレス
○祝 賀 会	9月28日(木) 午後6時～7時30分	ホテルニューオータニ博多
○記 念 講 演 会	9月29日(金) 午後1時～3時	福岡市役所15階 講堂
○ワークショップ		
・比較文化研究フォーラム	9月29日(金) 午後4時～6時30分	福岡市役所15階 講堂
・南アジア地域研究フォーラム	9月30日(土) 午後12時30分～3時	福岡市役所15階 講堂
・教育研究フォーラム	9月30日(土) 午後4時～6時30分	福岡市役所15階 講堂
・芸術パフォーマンス	9月30日(土) 午後7時～8時	NHK福岡放送局テレビホール

授 賞 式

日 時：9月28日（木） 午後2時～3時30分
場 所：福岡サンパレス

1995年（第6回）福岡アジア文化賞授賞式は、在日アジア各国大使御夫妻、留学生、学術・教育・芸術・文化関係者及び市民等約850名の参加を得て開催された。式典では選考経過報告や贈賞理由説明の後、主催者による贈賞が行われ、受賞者の生い立ちや素顔、研究・芸術活動の一端を家族や研究者仲間等との写真スライドで紹介するなどにより、受賞者の業績を讃えた。

また、受賞者挨拶では、各受賞者が受賞の喜びや福岡市及び福岡アジア文化賞へのメッセージ、アジアに対する想いなどを語った。

来賓挨拶や藤舎名生氏、東儀秀樹氏らによる祝曲演奏も行われた。

PRIZE PRESENTATION CEREMONY

Date: 2:00 - 3:30 p.m., Thursday, September 28, 1995

Venue: Fukuoka Sun Palace

The Prize Presentation Ceremony of the 6th Fukuoka Asian Cultural Prizes 1995 was held with the participation of approximately 850 people, including Ambassadors of Asian countries and their spouses in Japan, exchange students in Fukuoka, other concerned parties from the fields of education, arts and culture, and citizens of Fukuoka. Following the presentation of the screening process summary and the citation for awards, each of the recipients were conferred their prize by the organizing committee representatives. As the achievements of each recipient were praised, their early days, profiles and photos taken with their families and colleagues were introduced with slides.

Each of the recipients related their joy upon receiving the prizes in their acceptance speeches and to the Fukuoka Asian Cultural Prizes, Fukuoka City as well as Asia in general.

In addition to the speeches by guests, a ceremonial musical performance was given by maestros of Japanese traditional music, Meisho Tosha and Hideki Togi.





藤舎名生氏による祝曲演奏 (能管)
 Ceremonial *Nokan* Musical Performance by Mr. Meisho Tosha



東儀秀樹氏らによる祝曲演奏 (箏篳)
 Ceremonial *Hichiriki* Musical Performance by Mr. Hideki Togi



授賞式フィナーレ
 Prize Presentation Ceremony Finale

受賞者挨拶



クンチャラニングラット

このように大変な権威のある福岡アジア文化賞の今年の大賞受賞者に選ばれたという知らせを聞き、言葉に表せないほどの気持ちを抱きました。心臓が止まるかと思うと同時に、感謝、幸福感、不安そして恐れにさえ似た気持ちを感じました。心の中の張りつめた思いをどうしても表現しなければならぬ必要に迫られたとき、私はよく言葉を失ってしまいます。ですから、このような大変重要な場においても、同じ表現を何度も何度も繰り返すしか術を知らないのですが、心の底からの言葉であることをご理解下さい。

福岡アジア文化賞委員会委員長様ならびに福岡市長様、この場をお借りして、今回私に与えられました名誉に対し心よりお礼申し上げます。この度のことは心に忘れがたい思い出となるでしょう。

過去50年間、日本の経済的技術的發展は他のアジア諸国の手本となってきました。ことに京都は、長い間日本における東南アジア研究の中心でした。私の希望としましては、福岡市には今後、例えばアジアの文化芸術あるいは儒教やイスラム教といったアジアの宗教の中心地になって頂きたいと思えます。

この素晴らしい国際賞の立派な受賞者の方々の仲間に入れて頂きました榮譽に対し、重ねてお礼を申し上げます。





韓 基 彦

この度は、はからずも荣誉ある「福岡アジア文化賞」の受賞にあずかり身に余る光荣と考
え、大変喜んでおります。

この賞を受けるに当たり、改めて、私を今日に至るまで育てて下さいました今は亡き父と
母、そして恩師でございます金桂淑（1905～1989）、金基錫（1905～1974）、李寅基（1907
～1983）御三方の御薫陶に対しまして深く感謝の意を表させていただきます。

振り返れば、これまでの私の人生は大気圏、成層圏、宇宙圏の時代であったという気がい
たします。怒涛さかまく時代の浪をくぐり抜けてここまで至ることができましたのも一重に
数多くの方々の御恩顧の賜物と思っております。それらの皆様方が学問の防波堤となって荒
浪のショックを防いで下さったお蔭で不肖私は、学問研究へのエロスの精神を存分に燃やす
ことが出来たのであります。身近な者としましては家内であります金憲卿教授の労苦といえ
ましょう。公式の席上での謝辞の意のあるところを汲んで頂ければ幸いです。

さて、「福岡アジア文化賞」受賞は私にとりまして、又とない力添えといえましょう。
1938年、教育への道に志を立てて以来、特に乙酉国権恢復を迎え、本格的に教育学に取り組
んで今日に至る半世紀、『橡の実は身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ』という句にも似た心境
での精進でございました。私はこのたびの受賞を「教育学」に対する顕彰という点で、その
意義の大であることを深く受けとめております。また、いささかなりとも私の母校であり長
年の勤務校でもありますソウル大学、と同時にわが祖国、大韓民国にその荣誉を返すことが
出来ればと思っております。

これまでの私の追求して参りましたテーマは人類の共存共栄を目指す新しい教育理論、教
育哲学の定立ということでもございました。ちょうど今より38年前、米國務省招聘交換教授と
してコロンビア大学での研修中、名づけたのが「基礎主義」（Kichojui=Foundationism）
でございます。その後、提唱、定立と成長を遂げているわけですが、これとても皆様方のお
蔭であるのは申すまでもございません。

基礎主義は「伝統と改革との調和を通じての人間形成の論理」であり、「すべての人の人
生を芸術的境地にまで昇華させる人間形成の基本原理解」でもあります。「福岡アジア文化賞」
のシンボルマークは、いみじくも球象教育哲学を謳っております基礎主義の「球象」にも通
じるところがあることに対しまして深い妙合を感じており、私自身非常に喜んでおります。

あらためて福岡アジア文化賞委員会の皆様方に対しまして厚く御礼申し上げます。

ありがとうございました。





辛島 昇

御列席の皆様、

今回はからずも名誉ある「福岡アジア文化賞」を頂戴して、身に余る光栄なことと存じております。これまで私は本当にいろいろの方々に支えられて研究を続けてまいりましたが、この賞は決して私一人に与えられたものではなく、そのように私を助けて下さった大勢の方々に与えられたものとして、ともに喜びを分かち合いたく思っております。

また、私がとくに嬉しく思いますのは、この価値ある賞を「福岡」で頂戴することにあります。実は、私自身は東京で生まれましたが、福岡は私の先祖が16世紀以来、黒田藩に仕えて長く住んできたところで、父も福岡で生まれ育っております。したがって今回の私の受賞を、今は亡き父や先祖たちもきっと喜んでくれるものと、感慨深く思っております。

しかし、そのような個人的な事情だけでなく、私は福岡市に対して日頃から深い尊敬の念を抱いてまいりました。と申しますのも、福岡は日本の歴史の中でつねに外に向かって開かれてきた土地であります。福岡市がその伝統を守り、率先してアジアとの交流を計られてきているからであります。それは福岡市民が誇りにすべきことであると存じます。

私が大学で東洋史を学び、インドの歴史を研究するようになりましたのは、実は自分のアイデンティティと関連して、「アジアとは何か」という問いに答えを見出だすためでした。これは大変に大きな問いで、私自身答えをまだ見つけておりませんが、それはもしかすると、「福岡アジア文化賞」がこれから築き上げて行く歴史の中に見出だせるのかも知れません。

何れにしましても、私はこの受賞を私に対する「励まし」とうけとめ、今後さらに「アジアとは何か」という問いへの探求をつづけ、文化的により豊かなアジアをつくりあげること、少しでも貢献できればと思っております。福岡市ならびに市民の皆様、そして私を推薦、選考して下さいました皆様方に、深く御礼申し上げます。

ありがとうございました。





ナム・ジュン・パイク

今、アジア人に一番不足しているのは、いわゆるユーモア、あるいはユーモアの精神です。私はここで1時間位待っている間に、どうやって今日の聴衆を笑わせてやろうかと色々と考えていたのですが、大変難しい聴衆だと思いました。

それで、ちょっと戦術を変えて、私の体験をお話しますと、あるときパリのポンピドゥ・センターでたまたまカナダのアメリカン・インディアン種族の研究者に出会いました。「もし、私がアメリカ大陸で生まれた場合、どの種族に属するだろうか。ホビーであろうか、それともアパッチ族だろうか。」と聞いたら彼は一瞬のためらいもなく、「お前はエスキモーだよ。」といったんですよ。私も大体そう思っていたんです。それで私はエスキモーだと思っていたら、ニューヨークのメトロポリタン近くのタクシードライバーと、ドイツのデュッセルドルフのタクシードライバー、彼らはどちらもトルコ人なのですが、聞いたら、「お前はトルコだろう。」とやってきたんですよ。それで私はアパッチではないけれども、エスキモーとトルコの真ん中だろうと。それで、韓国がそうであるかもしれないけれど、実はアジアは何だろうと、さっき辛島教授が言われたことを実感として考えていますが、アジアの特徴は目が小さいことです。

どうもありがとうございました。



記念講演会

日 時： 9月29日（金）午後1時～3時

場 所： 福岡市役所15階講堂

参加者： 約400名

各受賞者が専門分野の話ばかりでなく、生き立ちや研究活動、人生観といった幅広い内容で、講演を行った。

1 クンチャラニングラット 氏

クンチャラニングラット氏は、母国インドネシアが1,000を越す多民族・多言語の国であることから始めて、家族を含めた自らの生き立ちや研究活動、趣味等について次のように語った。

ジャワの一王家の宮廷役人の家に生まれ、独立戦争に際し、インドネシア大学生軍の一員として参加するなどした後、ガジャマダ大学に復学し、インドネシア大学を経て米国に渡り、イエール大学で社会文化人類学を学んだ。

インドネシア大学に戻ってからは、インドネシア人の研究者が自分一人であり、また、自国出身の有能な研究者をそろえた学科を作るという任務を兼ねていたため、多忙な学究生活を送った。その間、京都大学等の客員教授として招聘されたが、これらの大学滞在中にもった友人・同僚とのつながりやディスカッションが、学問としての社会人類学という面だけでなく、普遍的な人類の価値の理解といった面においても、自分の経験を深くかつ広くし、普遍的な人類の価値は存在するという信念を強め、その価値に基づいてアジアの相互理解・平和が促進されていくことを確信させた。

また、高校時代には、ジャワの宮廷舞踊とガムランに魅せられ、最後には、学生に教えるまでになった。同じく高校時代からの趣味で、学究生活のために40年以上もあきらめていた絵画を、65才で教授職を退官後再び始め、展覧会をパリや台湾など7か所で開き、今回、福岡アジア文化賞においても、絵画が数点展示された。

そして、最近インドネシアにおける伝統食産業開発の持つ社会文化的問題に自ら取り組んでいるが、この問題を達成させるためには、経済的研究や食物科学・栄養学研究だけでなく人類学的研究を行い、インドネシア人の文化的多様性を研究する必要があったことや日本の伝統食・食習慣についての見解を述べて講演を結んだ。



2 韓 基 彦 氏

韓氏は、累代に亘る文翰の家系で裕福な家庭に育ち、母の死後は、外曾祖母に育てられ
躰られたと、自分の生き立ちについて述べた。

次に、生涯を通じて、1945年8月15日は、日本の植民地支配から解放された歴史的大事
件であり、50年後の今年も、「光復」50周年であると同時に、自分が教育学を志してから
も50周年に当たると述べ、「教育学の勧め」という趣旨で、次のように語った。

中学から大学時代にかけての10年間、水泳選手として現役生活を送り、記録低調のため
実際に参加はできなかったが、ロンドンオリンピック大会出場正選手として選ばれたこと
があり、この水泳選手生活を通じて得た3つの人生訓がある。1つは、「浮かばないこと」
である。「浮く」ことは、推進力がなくなったことでもあるから、「浮かばないこと」と
は、推進力を失って一步も前進できないようなことがあってはならないということであり、
早老現象をいましめる意味がある。2つめは、「音をたてないこと」である。うまく泳ぐ
人は、低めの音しかたてないが、実はそれが最も着実に水を蹴って泳いでいるのであり、
肝心なのは本人の実力であって、積功と実績こそが大事だという意味である。3つめは、
「空振りをしないこと」である。うまく泳ぐ人は、空振りもせず着実に水を掻いて先に進
む。また、水泳選手が練習をさぼると掌から水が漏れて空回りしている感じがするように、
人生においても毎日を大事に誠実に生きるべきである。

続いて、「基礎主義」の観点から、人間形成の核思想、教育的羅針盤としての「指南型」
教育、教育国家の建設について自論を展開し、最後に、21世紀は「教育の世紀」であり、
新しい世界秩序による教育国家は、人類の共存共栄の理想が実現される理想国家といえ、
「教育学」はすべからく万人の教養学として解放されるべきであって、世界人類全てが、
「教育的心性陶冶」をなすことによって、恒久的世界平和の実現も可能となるのだと主張
し、講演を結んだ。



3 辛島 昇 氏

辛島昇氏は、高校の頃からアジアの歴史に興味を持っていたが、「アジアとは何か」という疑問とともにアジアという概念がネガティブに作り出されたもののように思え、インドの歴史を学びインド文明と中国文明の比較によってアジアの概念をポジティブに定義することができるかもしれないと考えたと述懐した。

また、アジアの歴史に興味を持つようになったのは、自分のアイデンティティの形成と関連している。終戦後中学生の頃、姉と込み合った電車に乗った時、自分を車外に押し出そうとする進駐軍兵士の白い大きな手の気味悪さと怖さを感じた。その時、直感的に、彼らは、そして私は、一体何者なのかと感じ、それが後に自分にアジアの歴史を専攻させることになったのであり、今もなお「アジアとは何か」という疑問を持ち続けていると語った。

次に、自分の大学時代には、南インドの歴史を研究しようとする人は、その当時の日本には誰もいなかった。古代・中世については、歴史書が全くなく、ヒンドゥー教石造寺院の刻文、特にタミル語のものが唯一の史料だということがわかり、タミル語の勉強を始めた。そのため、インド政府刻文史料編纂所で研究生活をおくり、その時代に残された刻文全体からどのようなことがいえるかという計数的手法で研究を進め、社会の発展を明らかにする研究に際して、人々の意識や日常生活の問題に興味を持つように、カースト制や陶磁器、カレーライスなども研究対象とするようになったと自分の研究活動を振り返った。特にカレーライスについては、ついに人気漫画『美味しんぼ』で「カレーに詳しい辛島先生」として、登場するようになったいきさつなどもユーモアを交えて紹介した。

そして、アジアの中にも異なった文化があり、そのぶつかり合いの中から一つのもが生み出されてくるとすれば、自分が探求しようとしているのは、歴史を通じて起こるぶつかり合いによって、はじめて「アジア」が生み出されるということなのかもしれない。ぶつかり合いは、アジア地域における異文化の間であると同時に、西洋とのぶつかり合いでもある。しかし、そのぶつかり合いから、やがて一つの新しいものが生み出されてくるのであって、文化の創造とは、ネガティブなものをポジティブなものに変えていくことだと述べ、最後に、今日の講演を通じて、「アジアとは何か。」という問いに、ひとつの答えを見つけたと思うと結んだ。



4 ナム・ジュン・パイク氏

ナム・ジュン・パイク氏は、1973年に制作した「グローバル・グルーヴ」について、「この作品は文化のぶつかり合いをオーディオ・ビジュアルで表現したもので、地球的な映像の最初の試みであり、また、後のMTVの原型となった。現在では、韓国でも香港のスターTV、日本のNHK、アメリカのCNNなどを見ることができ、グローバルTVは実用化されているが、22年前の作品としては自慢できる作品である。」と述べた後、実際に作品の一部を上映した。



<上映作品紹介>

「グローバル・グルーヴ」(1973年)

パイク様式のビデオ・テープ作品の代表作。日本人エンジニア阿部修也の協力を得て開発した<パイク/アベ ビデオ・シンセサイザー>を駆使し、いくつもの画像をオーバーラップしたり、抽象的な色のパターンを合成したり、カラフルな色彩処理をしたりと、さまざまなビデオによる特殊効果を使って、アメリカ的なモダンダンスや韓国の民族舞踊、「ジョン・ケージに捧ぐ」などの過去の作品や、アメリカの大統領の顔が磁石によって歪曲した「磁石TV」などの断片的映像、パフォーマンスの記録など次々に映し出したかと思うと、突然、日本のペプシコーラのコマーシャルを挿入したりと、音楽によって結合された映像がめまぐるしく変わっていく。

比較文化研究フォーラム

日 時：9月29日（金）午後4時～6時30分

場 所：福岡市役所15階講堂

参加者：約100名

- 1 テーマ 「伝統的文化価値と普遍性——インドネシアと日本」
- 2 内 容 インドネシアと日本の文化価値を比較していく中で、普遍的価値と文化の固有性のあり方を検討し、日本とアジア諸国の相互理解と相互協力の基盤を模索する。

3 プログラム

基調講演 福岡アジア文化賞大賞受賞者 クンチャラニングラット

問題提起 東京大学名誉教授 吉田 禎吾

京都大学東南アジア研究センター教授 加藤 剛

九州芸術工科大学芸術工学部教授 波平恵美子

パネル・ディスカッション

パネリスト

クンチャラニングラット

吉田 禎吾

加藤 剛

波平恵美子

コーディネーター

京都大学東南アジア研究センター教授 立本 成文

4 問題提起

吉田禎吾氏がクンチャラニングラット氏の価値体系についてコメントした後、加藤剛氏は、「緊密な親族関係と相互協力」の観点から、波平恵美子氏は、「自然との調和を保ちながら生きること」について問題提起を行った。



立本 成文氏
Prof. Narifumi Tachimoto



吉田 禎吾氏
Prof. Teigo Yoshida



加藤 剛氏
Prof. Tsuyoshi Kato



波平恵美子氏
Prof. Emiko Namihira

南アジア地域研究フォーラム

日 時：9月30日（土）午後12時30分～3時

場 所：福岡市役所15階講堂

参加者：約90名

- 1 テーマ 「南アジア世界の近代と文化」
- 2 内 容 21世紀を迎えるにあたり、アジアの国々も今や新しい世界文化の創造を求められている。南アジアの社会と文化を日本との比較も含めて、その条件を考える。

3 プログラム

基調講演 福岡アジア文化賞学術研究賞国内部門受賞者 辛島 昇

問題提起 福岡市美術館副館長 安永 幸一

九州共立大学経済学部教授 弘中 和彦

長崎県立大学経済学部教授 長島 弘

パネル・ディスカッション

パネリスト

辛島 昇

安永 幸一

弘中 和彦

長島 弘

コーディネーター

京都大学東南アジア研究センター教授

應地 利明

4 問題提起

安永幸一氏は、絵画における日印交流について、弘中和彦氏は、教育分野での日印交流について、長島弘氏は、ムガル朝時代を中心にインドの国際交流・国際関係について問題提起を行った。



應地 利明氏
Prof. Toshiaki Ohji



安永 幸一氏
Mr. Koichi Yasunaga



弘中 和彦氏
Prof. Kazuhiko Hironaka



長島 弘氏
Prof. Hiromu Nagashima

教育研究フォーラム

日 時：9月30日（土）午後4時～6時30分

場 所：福岡市役所15階講堂

参加者：約80名

- 1 テーマ 「変動社会における人間形成」
- 2 内 容 地球規模で多様な価値体系が接触し、自他のアイデンティティーが問われる
今日、個性教育の重要性が認識されつつある。このような現状を踏まえ、国際
的視野から現代教育の諸問題を考える。

3 プログラム

基調講演 福岡アジア文化賞学術研究賞国際部門受賞者 韓 基 彦

問題提起 九州大学教育学部助教授 稲葉 継雄

名古屋大学教育学部教授 馬越 徹

パネル・ディスカッション

パネリスト

韓 基 彦

稲葉 継雄

馬越 徹

コーディネーター

九州大学教育学部教授

丸山 孝一

4 問題提起

稲葉継雄氏が、教育史の観点から「近現代における日韓両国社会の変動と歴史教育の推移」を、将来の展望を含めて語り、馬越徹氏は、比較教育の観点から「日韓の現代教育における諸問題（教師・親・子の関係や入試、体罰、いじめ等）」を比較しながら現状を述べた。



丸山 孝一氏
Prof. Koichi Maruyama



稲葉 継雄氏
Asst. Prof. Tsugio Inaba



馬越 徹氏
Prof. Toru Umakoshi

芸術パフォーマンス

日 時：9月30日（土）午後7時～8時

場 所：NHK福岡放送局テレビホール

参加者：約350名

1 タイトル 「歸去來」

2 出演者

ナム・ジュン・パイク

福岡アジア文化賞芸術・文化賞受賞者

風倉 匠

前衛芸術家 大分在住

ネオ・ダダの結成に参加。日本のパフォーマンス・アートの草分け

小杉 武久

音楽家 米国在住

マース・カニングハム舞踊団の作曲家／演奏家

邦 千谷

舞踊家 東京在住

ビデオ・アーティスト久保田成子氏（パイク氏夫人）のおば

ARTISTIC PERFORMANCE

Date: 7:00 - 8:00 p.m., Saturday, September 30, 1995

Venue: TV Hall of NHK Japan Broadcasting Station, Fukuoka

Approximately 350 participants

1. Title "Kikyorai"

2. Performers

Mr. Nam June Paik
Art and Culture Prize recipient

Mr. Sho Kazakura
Avant-garde artist based in Oita Prefecture
Participated in the formation of the Neo Dadaism Movement.
Mr. Kazakura is a pioneer of Japan's performance art.

Mr. Takehisa Kosugi
Musician based in the U.S.A.
A composer/player of the Martha Cunningham Dance Company

Ms. Chiya Kuni
Tokyo-based dancer
She is an aunt of videoartist Shigeko Kubota (wife of Mr. Paik).

3 概要

冒頭に、パイク氏から「現代音楽は死につつある…。ポップ音楽だけでは人間の欲望は満たされない。ポップというのは心臓のリズムに近く、極めてレギュラーである。新聞、雑誌を読む場合は、立ってでも読める。しかし、哲学や難解な詩は、あえぎながら、途中、止まりながら読み進み、やっと目的にたどり着くのである。即ち、自発的に自らが創りだした苦しみにあえぎ、障害物を乗り越えてはじめて、人間の高級な精神の営みがあるのである。苦しみあえぎながら音を編む、難解で娯乐的でない現代音楽の存在理由もそこにあるのではないか。その音楽とビジュアルを組み合わせると、そこに、難しいが、しかし意味のある作品が生まれると思う。」という現代音楽への想いが語られた後、場内のすべてのライトが消され、パイク氏のピアノ演奏が始まった。ピアノの音響とともに、右手に持った小型ビデオカメラでピアノや手や自らの顔を広大なスクリーンに映し出し、それは大小十面の映像となって激しく踊り、幻想的な世界を創り出す。これに風倉氏が中に入った真っ黒なバルーンの動きと邦氏の祈りのような静かな舞踊が絡み、観客をパフォーマンスの世界へ引き込んでいった。

パイク氏中心のパフォーマンスが続いた後、小杉氏の声とバイオリンによるパフォーマンスが始まる。その声は音響装置で加工され、場内に響きわたる。きしむようなバイオリン演奏は時空の歪みさえ感じさせる。風倉氏のバルーンはしぼみながら舞台にはいあがりピアノに絡み始める。そのしぼんだバルーンから出てくる風倉氏をパイク氏がカメラでとらえ、スクリーンに映し出す。音と映像とバルーンと人体の複合されたパフォーマンスが続いた後、パイク氏がピアノに戻り、静かにメロディーが奏でられた。その手と鍵盤がスクリーンに映し出され、音楽と映像が一体となって会場に流れ、パフォーマンスは静かに終わった。



(写真家：石松健男氏撮影)
Photo: Takeo Ishimatsu